はじめに

本稿は、インドネシアの独立宣言後、1946年から1949年までインドネシア共和国の首都だったジョグジャカルタにおいて、ガジャマダ大学（Balai Perguruan Tinggi Gadjah Mada, 後に UGM: Universitas Gadjah Mada）とインドネシア・イスラーム大学（UII: Universitas Islam Indonesia）は、創設後どのように国家との関わりを築いてきたのかについて明らかにしようとするものである。ヨーロッパによる植民地支配を経験した国々では、植民地期に、植民地当局が必要とした専門教育を中心に行う高等教育機関が創設されることが多かった。インドネシアの場合、独立宣言の後、再占領を図った旧宗主国オランダが、医学や法学、工学などのオランダ植民地時代に創設された複数の都市の専門学校を再開し、ジャカルタなどの主要都市を拠点とするインドネシア大学（Universitet van Indonesie, 後に UI: Universitas Indonesia）を創設した。創設時はオランダ語を教授言語としたが、後にインドネシア語に変更され、教職員もインドネシア人化が図られたことは、William K. Cummings, Salman Kasenda (1989) で論じられている。しかし、インドネシアの高等教育における歴史的背景の全体像を捉えるためには、インドネシア大学と同時期に、プリブミ（pribumi: 土着の人々）のエリート、すなわち植民地期に蘭領東インド内もししくは西欧諸国や中東諸国で教育を受け、独立後の国家形成に関わった者たちが創設した大学を含めて考察することが重要となる。

インドネシアの高等教育の歴史的背景に関する先行研究には、R. Murray
論文

Thomas（1973）やMochtar Buchori, Abdul Malik（2004）などによる植民地期から独立後にかけての高等教育の制度化や量的拡大の経緯を整理した研究がある。また、特定の大学の創設の経緯とともに運営方法や学部、カリキュラムなどに関する考察もなされてきた。例えば先述したインドネシア大学と、プリブミ主体で創設した大学の代表例としてのガジャマダ大学の比較研究（William K. Cummings, Salman Kasenda 1989）や、インドネシア・イスラーム大学に焦点を当てた研究（中田 2010）などがある。

しかし、これまでの研究では、大学が創設された特定の地域性や大学教育に活用された「場」に着目し、同時期に創設された複数の大学の関係性を考察することには、ほとんど関心が払われてこなかった。

独立後、プリブミのエリートらが主体となって最初に創設した大学が、ジョグジャカルタのガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学だった。その後ガジャマダ大学はインドネシア共和国省庁下の複数の教育機関と統合して国立大学となり、インドネシア・イスラーム大学は、一部の学部を国立移管することで、国立大学の創設に関わった。

ジョグジャカルタは、かつてマタラム王国というイスラーム王国の末裔ら拠点とした王宮都市の構造と、旧宗主国オランダによる植民都市の構造を併せ持つ。ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学は、王宮関連施設や植民者の居住区だったエリアに創設されたモスクを大学教育に活用していた。二つの大学が創設直後から活用した「場」の象徴性を考慮しつつ、両大学の国立大学創設への経緯を明らかにすることは、新生国家が必要とした高等教育の在り方を読み取ることを可能とし得る。

したがって本稿では、ジョグジャカルタで創設された二つの大学と国家との関わりを明らかにするため、両大学が私立大学として創設され、その後国立大学の創設に関わっていく経緯とともに、両大学が、創設時から共通して活用していた「場」が有する象徴性についての考察を行う。

二つの大学の創設の経緯や1946年から1960年代に両大学が主として活用した場については、それぞれの大学史に関する資料を頼りに整理していく。ガジャマダ大学については、Sardjito（1953および1954）、Bambang Purwanto, et al.（1999）を用い、インドネシア・イスラーム大学については、Dewan Pengurus
独立後のインドネシアにおける大学創設と国家との関わり

Pusat Badan Wakaf UII（1955）、Supardi, et al.（1997）、Djauhari Muhsin, et al.（2002）、さらに両大学が大学施設として使用していた時期があるシュハダ・モスクの資料として、Ahmad Basuni（1956）と Suratmin（2001）を用いる。

以下ではまず、インドネシア史におけるジョグジャカルタの町の社会・政治的意味を概説したうえで（第1節）、ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学の創設および国立化について整理する（第2節）。さらに1946年〜1960年代頃まで、両大学が大学教育に活用した場を明らかにし（第3節）、最後に、両大学の創設・発展と、大学教育に活用した「場」の象徴性の意義をふまえて、独立後のインドネシアにおける二つの大学と国家との関係を考察する（第4節）。

1. インドネシア共和国の首都となったジョグジャカルタ

ジョグジャカルタやその周辺を拠点としたマタラム王国は、18世紀後半、王位継承をめぐる問題が生じた際、蘭領東インドの仲裁により、ジョグジャカルタとスラカルタに分裂して王位を継承してきた。これを機に、オランダの監視のもとで、王宮を中心とするジョグジャカルタの町が創られた。

1945年8月17日の独立宣言の際、インドネシア共和国は現在の領域とは異なり、ジャワ島、マドゥラ島、スマトラ島の一部のみから成る国家に過ぎなかった。それは、蘭領東インド内の複数の王国のなかには、インドネシア共和国が独立することに賛同しない国も少なくなかったためである。そうした中、ジョグジャカルタのスルタン（王）は、早くからインドネシア共和国の独立を支持した。独立宣言の後、それまでオランダに代わって支配していた日本が敗戦し、オランダが再占領を試みたため、首都ジャカルタを中心に、オランダとインドネシア共和国との独立闘争が勃発した。この時、ジョグジャカルタへの首都移転を快く引き受けたのが、ジョグジャカルタのスルタンだった。スルタンは、ジョグジャカルタのもう一つの王家パクアラム家とともに一つにまとまり、インドネシア共和国の一部であることを主張した（Seno Joko Suyono, et al. 2015:15-16）。首都移転後、インドネシア共和国の省庁やその関係者もジョグジャカルタへ移った。スルタンにとって、オランダからインドネシア共和国が
論文

独立した後も、自らの存在意義を示し、一定の社会・政治的立場を維持するためには、かつての王国の歴史や伝統を持続しながらも、新生国家インドネシアの誕生を支持し、国家の形成に寄与することは重要だったといえよう。

1946年から1949年までの独立闘争期のうち、1948年末にはジョグジャカルタとその周辺も、他の都市と同様にオランダ軍が占領したこともあった。しかし、ジョグジャカルタはスルタン主導の下で激動の時期を乗り越えた。その功績を、政府は高く評価し、ジョグジャカルタは「ジョグジャカルタ特別州」として、今日においても州知事職および副州知事職は、他の州のような選挙ではなく、スルタン王家とパクアラム王家の者が代々就任することが保障されている。

その後首都がジャカルタに置かれたのは、1949年末、オランダが、支配していた領域内の複数の国家とインドネシア共和国から成る「インドネシア連邦共和国（RIS：Republik Indonesia Serikat）」の成立を容認した時だった。その翌年、ほとんどの連邦内の諸国家がインドネシア共和国に合流し、連邦制は廃止されたことで、ようやく単一のインドネシア共和国が誕生した。したがって、インドネシア共和国の歴史において、ジョグジャカルタは、1946年から1949年までオランダとの独立闘争が続いた新生国家の危機に、重要な役割を果たした首都だった。

2. ジョグジャカルタにおける二つの大学の創設と発展

ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学は、独立後、国家の要職に就いたプリムオのエリートらが創設した高等教育機関である。以下では、創設当初は私立大学だった両大学が、教育と宗教の国立の専門教育機関の創設に関わった経緯（図1参照）を明らかにする。

（1）ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学の創設と国立移管の経緯

1）ガジャマダ大学の創設と国立化

ガジャマダ大学は、1946年、ジョグジャカルタのスルタン、ハメンクブウォノ9世を理事とし、初代教育大臣を務めたキ・ハジャル・デワンタラを副理事
とする理事会のもとで私立大学として、文学部と法学部を開設した（Bambang Purwanto, et al. 1999:10, R. Murray Thomas, 1973:59-60)。当時、ジャカルタではオランダによる再占領のため、インドネシア共和国政府の省庁が管轄したことになった医学、歯学、法学などの複数の高等教育機関は運営が困難となった。ガジャマダ大学は、ジョグジャカルタやその周辺へ移転したこれらの高等教育機関とともに、1949年12月19日、医学・歯学・薬学部、法・社会・政治学部、工学部、文学・哲学部、農学部などから構成される国立ガジャマダ大学となった（Bambang Purwanto, et al. 1999:12-14）。創設時の学生数は約500人だったが、1954年12月には8301人となった（Sardjito 1954:8）。他方、同年のインドネシア大学の学生数は8897人だった（William K. Cummings, Salman Kasenda 1989:161）。インドネシア大学は、ジャカルタをはじめとする複数の都市における植民地時代の専門学校を再開することで開設された大学である。ガジャマダ大学とインドネシア大学の学生数は、当時ほぼ同数だったことになるが、ひとつの町の学生数で比較するならば、学生数が8000人を超えるジョグジャカルタのガジャマダ大学は、大規模校だったと言えよう。

ガジャマダ大学の初代学長は、ヨーロッパでの教育経験を持つ医師のサルジト（Sardjito）だった。1949年12月末、オランダの承認を得てインドネシア連邦共和国の首都がジャカルタに置かれる際、ガジャマダ大学がジャカルタに移転し、インドネシア大学と統合する計画があった。しかし、ガジャマダ大学はこれを拒み、独立闘争を乗り越えたジョグジャカルタに留まって、高等教育の機会拡大に努めることを選択した（William K. Cummings, Salman Kasenda, 1989:146-147, Bambang Purwanto, et al. 1999:16）。このようにガジャマダ大学は、プリブミのエリートらが主体となって創設し、ジョグジャカルタを拠点として発展した。

2）インドネシア・イスラーム大学の創設と宗教省との関わり
イスラーム高等教育学院（STI: Sekolah Tinggi Islam）は、複数のイスラーム組織の指導者らが結成したイスラーム団体によって創設された教育機関だった。1945年7月8日にジャカルタで創設された後、1946年にジョグジャカルタへ移転し、1948年にインドネシア・イスラーム大学となった。この時、受け入れ
可能な学生数は約350人であり（Supardi, et al. 1997: 53）、ガジャマダ大学と比較すると小規模の大学であった。

イスラーム高等学院の創設時の開設科目は、イスラームの基本的な教義に関する科目に加え、心理学や社会学、歴史、文化、サンスクリット語など一般科目も多く設けた（Djauhari Muhsin, et al. 2002: 33）。その後、宗教、法、教育、経済の4つの学部からなるインドネシア・イスラーム大学となった後も、イスラーム高等学院と同様に、護教的なイスラームの宗教専門家の養成を主たる目的とはせず、むしろ様々な分野の専門性を高めることを理想とした。（Supardi, et al. 1997: 27, Djauhari Muhsin, et al. 2002: 40）。各学部はアラビア語やイスラームの教義や法に関する科目を設けたが、例えば教育学部では「教育哲学」や「実験心理学」などの専門科目を学び、宗教学部では、「宗教史」や「宗教社会学」、「倫理」などの他、東洋および西洋諸国の言語に関する科目も開設した（Djauhari Muhsin, et al. 2002: 43-45）。入学者のうちイスラーム高校出身者には、大学準備教育として、一般高校の科目を学ぶ機会を設けた（Djauhari Muhsin, et al. 2002: 46）。

イスラーム高等学院創設時の理事長は、インドネシア共和国の副大統領となったモハマド・ハッタが務め、イスラーム高等学院およびその後身のインドネシア・イスラーム大学の初代学長を務めたのは、エジプトやメッカで学問を修めた経験を持ち、日本軍政下の宗教省の役職に就いたカハール・ムザッキル（KH. A. Kahar Muzakkir）だった（Supardi, et al. 1997: 21-23）。また、イスラーム高等学院からインドネシア・イスラーム大学への発展には、インドネシア共和国の宗教大臣を1946年10月～1947年7月まで務めたファトゥラフマン・カフライウィ（K. H. Fathurrahman Kafrawi）が尽力した（Azymardi Azra, Saiful Umam (ed) 1998: 41-43）。このようにインドネシア・イスラーム大学の創設には宗教省の役職に就いた人物が関わり、宗教と一般の両方の知識を提供した。

（2）宗教と教育の国立の専門教育機関の創設

1951年、インドネシア・イスラーム大学の宗教学部を母体とする宗教省管轄の国立イスラーム宗教大学校（PTAIN：Perguruan Tinggi Agama Islam Negeri）が創設された際にも、先述の宗教大臣の経験を持つファトゥラフマン・カフライウィ
独立後のインドネシアにおける大学創設と国家との関わり

ウィが関わった（Azymardi Azra, Saiful Umam（ed）1998：42）。

1950年以降、宗教省は、宗教師範学校や宗教判事学校など、イスラームの宗教に関する中等教育レベルの専門職養成校を各地で開設し始めた。これらの学校では、イスラームの宗教科目だけでなく国語や英語、数学、地理、経済などの一般科目も提供し（Mahmud Yunus 1996（1960）：388-393）、近代的な独立国家において役割を果たし得る宗教の専門職養成を目指した。高等教育レベルにおいては、国立イスラーム宗教大学校において、イスラーム教育（Tarbiyah）、イスラーム法（Qodlo）、ダッワ（Da’wah：イスラームの伝道）の三つの学部を設けた。各学部では、イスラームの宗教に関する科目とともに、哲学や社会学、心理学、比較宗教学などのイスラーム以外の科目も設けた（Mahmud Yunus, 1996（1960）：396-397, 400-401）。入学者選抜に関しては、一般高校出身者を無試験で受け入れ、宗教師範学校やその他の職業学校出身者には英語かアラビア語、経済、地理、歴史（世界史／インドネシア史）などの科目の試験を行った。また、インドネシア・イスラーム大学と同様に、イスラーム高校出身者には、大学準備教育としてイスラーム関連科目のほか、一般高校の科目を学ぶ機会を設けた（Mahmud Yunus, 1996（1960）：398-399）。つまり、国立イスラーム宗教大学校は、イスラームの宗教の専門職養成を目的とした高等教育機関とはいえ、一般知識の習得をも重視していたのである。

他方で、1948年のインドネシア・イスラーム大学創設時、教育学部長だったシギット（Drs. A. Sigit）も宗教省の役職に就いていた人物だった。しかし1951年、インドネシア・イスラーム大学の教育学部が国立移管され、ガジャマダ大学が文学・哲学学部を、文学・教育・哲学学部として開設する際、シギットは正式に、ガジャマダ大学の教授職に就き、宗教省から教育・教授・文化省へ異動した（1951年第56号インドネシア共和国大統領令：Keputusan Presiden Republik Indonesia No.56 tahun 1951）。このように、インドネシア・イスラーム大学の宗教学部と教育学部には、創設時から、宗教省の関係者が教育と運営に従事し、その後の国立移管にも関わっていた。

蘭領東インド時代、オランダはジャワを中心に西欧式の学校を開設し、20世紀初頭にはジョグジャカルタにも師範学校（Kweekschool）が開設されていた（例えばAbdurachman Surjomiharidjo 2008：71）。しかし複数の学問分野を
論文

有する総合大学となったガジャマダ大学は、教育に関する学部開設において、植民地期にオランダが創設した師範学校などをモデルとはせず、プリブミが創設したインドネシア・イスラーム大学の教育学部の国立移管を受け入れた。

二つの学部の国立移管のため、インドネシア・イスラーム大学は、大学の規模を縮小せざるを得なかった。しかし、人口の約90％がムスリムであるインドネシアでは、独立後、高等教育を含む近代的な学校制度を整備するにあたって、イスラームの要素をカリキュラムや学校制度に位置付けることは、多くのプリブミのイスラーム指導者らの支持を得るためにも重要な意味を持った。したがって、宗教省の役職に就くプリブミのエリートらが、インドネシア・イスラーム大学を創設し、二つの学部の国立移管に関わったことは、イスラームの価値を、新生国家における高等教育に導入するための重要な試みだったといえ る。

| 年代 | ガジャマダ大学 | 国立ガジャマダ大学 | イスラーム高等学院 | イスラーム宗教大学 |
|------|----------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1946 | 学部:文学部・法学部 | 医学部、薬学部、法学部など | インドネシア・イスラーム大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1948 | (インドネシア共和国政府立) | （インドネシア共和国政府立） | 学部(教育・宗教・法・経済) | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1949 | 初期学部:医学部、薬学部、法学部など | 国立ガジャマダ大学 | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1951 | 農学、文学・哲学などの学部 | 国立ガジャマダ大学 | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1955 | 文学・教育・哲学部 | 国立ガジャマダ大学 | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1961 | 文学部、教育学部、哲学部 | 国立ガジャマダ大学 | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 1964 | 国立ジョグジャカルタ教育大学 | 国立ガジャマダ大学 | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |
| 2000年以降 | 国立ジョグジャカルタ大学 |  | 国立イスラーム宗教大学 | 国立イスラーム宗教大学 |

図1 ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学の国立化の経緯
（3）まとめ

1950年代後半以降、インドネシアにおいて国立大学が設立されていく際、既存の私立大学の国立移管は、各地で行われたことだった（R. Murray Thomas 1973:184-187）。したがって、独立直後のジョグジャカルタにおいて、プリブミのエリートらが、二つの私立大学を創設し、それらを国立化したことは、インドネシアの高等教育機関の創設・発展における先駆的な試みだったといえる。

インドネシア・イスラーム大学の教育学部を国立移管して創設されたガジャマダ大学の文学・教育・哲学部は、図1に示したように、1955年に文学部、教育学部、哲学部に分かれ、教育学部は、後に国立ジョグジャカルタ教育大学となり、その後総合大学化し、国立ジョグジャカルタ大学となった。他方、インドネシア・イスラーム大学の宗教学部を母体とした国立イスラーム宗教大学校は、1961年にイスラーム宗教公務アカデミー（ADIA）と統合して国立イスラーム宗教大学（IAIN）となり、1980年代までに全国に14校設置された。2000年以降、それらが順次総合大学化し、国立イスラーム大学（UIN）となった。したがって、インドネシア・イスラーム大学の二学部の国立移管と国立ガジャマダ大学の文学・教育・哲学部の創設は、教育と宗教のそれぞれの専門職養成を目的とした国立の高等教育機関の創設と発展の礎となった。

3. 1946年から1960年代にかけて二つの大学が活用していた場

1946年から1949年まで首都だったジョグジャカルタでは、オランダとの独立闘争の影響もあり、教育に関する法制度は十分に整っていなかった。独立宣言はしたものの、当時の政治・社会的な不安定さが、国家による高等教育の整備を遅らせたといえる。ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学は、特定の場所にキャンパスを持つことは困難だったため、1960年代頃までジョグジャカルタ市内の複数の場を活用し、大学教育を提供していた。

（1）ジョグジャカルタの町の二重性

ジョグジャカルタの町は、18世紀に生じたマタラム王国の内乱の際、オランダの調停を経て創設されたため、王宮都市と植民都市の両方の要素を併せ
持っている（鳴海1993：111-115, 133-135）。以下では、王宮都市の特徴をもつエリアを「王宮都市エリア」、植民都市の特徴をもつエリアを「植民都市エリア」とし、それぞれのエリアの特徴を整理したうえで、両大学が1946年から1960年代にかけて、主に活用していた場所を、両大学およびシュハダ・モスクの資料を頼りに明らかにしていく。これらの資料をもとに作成した図2では、1946年から1960年代半ば頃まで、二つの大学が王宮都市エリア（図2－A）と植民都市エリア（図2－B）内の複数の施設を大学教育に使用していた状況を示した（3）。また表1では、図2内の①～⑬として示した施設と大学が使用した時期を示した。

（2）王宮都市エリアにおいて二つの大学が活用した場

1）王宮都市エリアの特徴

ジョグジャカルタは、1755年以降、マンクブミ王が二本の川に挟まれた森を切り開いて王宮を建設したことによって創られた。図2に示したように、町の北側にはトゥグ（白い塔）、南側にはパンガン・クラピャック（四角いス
独立後のインドネシアにおける大学創設と国家との関わり

表1 図2内の①〜⑬の施設および活用した大学

| 場所（王宮都市エリアの王宮関連施設） | 使用していた大学 |
|------------------------------------|------------------|
| ⑤公的な執務にあたる高官の駐在所Dalem Kepatihan Yogyakarta（現ジョグジャカルタ特別州役所）のプンドポ（屋根はあるが無壁の建物で、公的・社会的に活用された場） | UII開校式（1948年） |
| ⑥シナディウィナタン地区のプンドポ | UII予科の教育（1949-1951年） |
| ⑧宗教官吏の駐在所Dalem Pengulon Yogyakarta（王宮の大モスクの北側） | UIIの前身STIの開校式（1946年） |
| ⑬シナガスム地区のプンドポ | UII予科の開校式（1948年） |

主に1950年〜60年代に使用された施設

| 場所（植民都市エリア） | 使用していた大学 |
|------------------------|------------------|
| ①チクディティロ通りのインドネシア・イスラーム大学の施設 | UII（1950年代から現在） |
| ②シュハダ・モスク（1952年創設） | UIIとUGM |
| ③ジェティス地区の工業高校 | UGM工学部（1950年代） |

| 場所（王宮都市エリアの王宮関連施設） | 使用していた大学 |
|------------------------------------|------------------|
| ④シュハダ・モスク女子寮（1962年創設） | UGM |
| ⑦シナガブヤン通り15番地（現アフマド・ダハラ通り） | UGM事務室（1950年代前） |
| ⑨パグララン（王宮前の公的な場） | UGM創設時（1946年）、UGM法・経済・社会・政治学部 |
| ⑩シティンギル（王国統治の執務の場） | UGMの式典など |
| ⑪ウィジラン地区周辺（貴族の居住区） | UGM文学・哲学・教育学部 |
| ⑫シナガスム地区周辺（貴族の居住区） | UGM医学・歯学・薬学学部など(4) |

注）ガジャマダ大学はUGM、イスラーム高等学院はSTI、インドネシア・イスラーム大学はUIIと記した。

テージのような建物が設けられ、その中心に王宮がある。北のトゥッグは、ジョグジャカルタの北側に位置するムラピ山と王宮を結ぶ役割を担い、南のパングン・クラピャックは南方にある海の女神がもつ超自然的な力と王宮とを結ぶシンボルとされている。これら二つのシンボルを結び、その中央に王宮を位置づけることで、大いなる自然の力と王の力とを並列させようとした（鳴海 1993：136）。

中心である王宮（クラトン）を取り囲む城砦の内側には、王宮の北側にパグララン（Pagelaran）という公的なゾーンやシティンギル（Sitinggil）という王
論文

国統治の執務などのゾーンがあり、王宮の東側と西側には、貴族の住まいが建てられた（鳴海 1993:138-148）。また、王宮を囲む城砦の外側は貴族の住まいのほかに庶民の居住地もあったが、北側はオランダ人の城砦が創られた。これは王宮都市を建設する際、スルタンがオランダとの衝突を避けるために建設を認めたことが背景にあるという（鳴海 1993:151）。

2）二つの大学が活用した王宮関連施設について

王宮都市エリアでガジャマダ大学が使用した場を地図上に示すと、図2の④、⑨、⑩、⑪、⑫の5カ所である。いずれも王族やその関係者が主として活用してきた場である。そのうち④以外は、城砦の内側の王宮関連施設であり、表1の通り、主に1950年代から1960年代にかけて使用されていた。しかし、実際の講義は困難なこともあった。例えば⑫を使用していた医学・歯学・薬学部は、他学部の学生も受講する新入生向けの講義の際、学生数が多く、早朝から席を確保する学生がいたほどだった（Sardjito 1953:4-5）という。

他方、インドネシア・イスラーム大学および前身のイスラーム高等学院が、王宮都市エリアで活用していた場を地図上に示すと、図2内の⑤、⑥、⑦、⑧、⑬の5カ所である。そのうち⑤、⑥、⑧、⑬は、主に1950年以前に活用されていた（表1参照）。城砦の内側は、⑧と⑬のみであり、それ以外の⑤、⑥、⑦は、城砦の外の北側に位置する。

3）まとめ

王宮都市エリアの、特に城砦内の王宮関連施設は主としてガジャマダ大学が使用していたが、インドネシア・イスラーム大学も、1946年から1949年の独立闘争期および後述するシュハダ・モスクの完成前に限って、王宮都市エリアの複数の場を活用していた。

王宮都市エリアは、18世紀半ば以降、スルタンが拠点としてきた王宮を中心とする構造を残している。しかし、第1節で述べたように、独立後のジョグジャカルタは、スルタンのハメンクブウォノ9世がインドネシア共和国の一部と位置付け、首都として国家に貢献した。したがって、両大学が活用した王宮関連施設は、イスラーム王国の歴史だけでなく、インドネシアの建国を導いた
象徴的な意味も有しているといえる。

（3）植民都市エリアにおいて二つの大学が活用した場

1）植民都市エリアの特徴

植民都市エリアは、主として鉄道の北側に位置し、オランダ植民地期に、オランダ人が必要とした施設が多く設立された。植民者らが居住したコタ・バル（Kota Baru）地区には、教会やスタジアムなどが創設され、ジェティス（Jetis）地区では、20世紀初頭にオランダ人が学校を建設した（図2の③）。しかし1952年、コタ・バル地区にシュハダ・モスク（Masjid Syuhada）が創設されたことで、プリブミのムスリムらが主体的に活動する場が形成された。シュハダ・モスクの「シュハダ」とは、アラビア語の「殉教」を意味する語を語源としており、オランダとの独立闘争で殉死した者たちを追悼する意味が付与されている（Panitia Pendirian Masjid Peringatan Sjuhada di Jogjakata 1952：14-16)。独立闘争による政治的混乱の最中、インドネシア共和国の大統領代理を務めたアサート（Assaat）が、1949年10月14日にシュハダ・モスク設立準備委員会を発足し、ジョグジャカルタ王家のハメンクブウォノ9世やインドネシア共和国の正副大統領のスカルノやハッタ、さらにジョグジャカルタ内外からの支援と協力（Ahmad Basuni 1956：17-20, Suratmin 2000：25-32）のもとで建設された。海外からは、パキスタンの支援も受けたという（Panitia Pendirian Masjid Peringatan Sjuhada di Jogjakata 1952：28-30)。

このようにシュハダ・モスクは、インドネシア共和国の独立を象徴する意味を付与されたモスクであり、多くのプリブミの政治指導者らが設立に関わった点に特徴がある。

2）二つの大学が活用したシュハダ・モスクについて

植民都市エリア内において、ガジャマダ大学の工学部が図2の③の工業高校を活用し、インドネシア・イスラーム大学は①の施設を1950年代から現在にかけて使用している。また、両大学が共通して活用したのがシュハダ・モスクだった。ガジャマダ大学は②のシュハダ・モスクおよび④のシュハダ・モスク所有地の寮を活用し、インドネシア・イスラーム大学は②のシュハダ・モスクを活用した。
論文

スク内の講堂と図書室を主として活用していた（Djauhari Muhsin, et al. 2002: 53, 67-68）。

1952年に完成したシュハダ・モスクは、礼拝スペースのほかに講堂や図書室とともに、寮を開設した（Ahmad Basuni 1956: 77）。礼拝スペース以外のこのような施設を有したことからは、古くからイスラーム世界で見られたような学問の場となること（例えばMakdisi 1980: 9-34）も想定されていたと言えよう。

インドネシア・イスラーム大学は、少なくとも1950年代は、シュハダ・モスクを週に5日間活用し、継続的使用料を支払っていた（Ahmad Basuni 1956: 48, 80）。同大学は、当時ジョグジャカルタとスラカルタに図書室を持ち、シュハダ・モスクの図書室は、インドネシア・イスラーム大学のジョグジャカルタの図書室として使用され（Djauhari Muhsin 2002: 68）、アラビア語やインドネシア語のほかに、ドイツ語やオランダ語などの文献も所蔵されていた（Dewan Pengurus Pusat Badan Wakaf UII 1955: 90-91、中田2009: 92-93）。

モスク設立の翌年の1953年、寮が完成すると、ヤスマ財団（寮とモスクの財団、YASMA: Yayasan Asrama dan Masjid）が結成された。ヤスマ財団は、「イスラームの精神を身につけた新しい世代の発展をめざし、インドネシアの若者の身体と精神を育成すること」を目的とし、ムスリムの若者のための寮や下宿を運営することを規約に記した（Ahmad Basuni 1956: 73, 76）。寮は、特定の大学の学生ではなく、シュハダ・モスクの講演活動に参加するムスリムを受け入れることになっていた（6）。しかし、1956年までのシュハダ・モスクの寮の運営費には、ガジャマダ大学から助成があったことが明記されている（Ahmad Basuni 1956: 82）。さらに1962年、シュハダ・モスクと社会省、国立ガジャマダ大学の協力によって、シュハダ・モスク女子寮がプリンゴクスマン通り（図2-④）に新たに創設されると、創設当初に限って、寮生はガジャマダ大学の女子学生を対象とした（Suratmin 2001: 82-83）。

ガジャマダ大学の資料（Bambang Purwanto 1999: 40-41）によると、1950年代の同大学は、町中に学生寮を開設したり、住民が運営する下宿に学生を住まわせた場合もあったという。ガジャマダ大学が、シュハダ・モスクの寮を活用していたことは大学の資料には明記されていない。しかしシュハダ・モスクの
資料によれば、シュハダ・モスクの寮は、当時急増したガジャマダ大学の学生のうち、ムスリムが住まうための重要な施設のひとつであったことがわかる。1960年代後半以降、ガジャマダ大学がジョグジャカルタ北部にキャンパスを構えたことにより、シュハダ・モスクの女子寮で暮らすガジャマダ大学の女子学生が減少すると、初めて他大学の女子学生がシュハダ・モスクの寮生として受け入れられた（Suratmin 2001:83-84）。

3）まとめ
上述のように、植民都市エリアのシュハダ・モスクは、モスクに付設する講堂と図書室はインドネシア・イスラーム大学が主として活用し、寮に関しては、ガジャマダ大学が主に活用していた。
シュハダ・モスクは、当時のプリブミの政治指導者らが、独立闘争で殉死した者たちを追悼する意味を込めて創設したモスクである。二つの大学は、そのような国家的な意味が付与されたモスクを大学教育に活用していたのである。

（4）二つの大学による王宮関連施設とシュハダ・モスクの活用について
ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学が、1946年から1960年代にかけて、独自のキャンパスを持つことが困難だった時期、学問の機会を提供できたのは、活用に支障のない王宮関連施設やモスクがあったためである。
表2は、二つの大学による双方の活用の仕方を整理したものである。ガジャマダ大学は王宮関連施設を主として活用し、インドネシア・イスラーム大学は植民都市エリアのシュハダ・モスクを主として活用していた。しかし一時的に、ガジャマダ大学はシュハダ・モスクを、インドネシア・イスラーム大学は王宮関連施設を活用していた。したがって、王宮関連施設とシュハダ・モスクは、双方ともに、二つの大学の教育や運営に必要な場だったといえる。

| 主として活用 | ガジャマダ大学 | インドネシア・イスラーム大学 |
|------------|-------------|------------------|
| 王宮関連施設 | シュハダ・モスクの講堂・図書室 |
| 一時的に活用 | シュハダ・モスクの寮 | 王宮関連施設（主に独立闘争期） |
4. ジョグジャカルタにおける二つの大学の創設と国家との関わり

（1）二つの大学による宗教と教育の専門職養成機関の創設への貢献

インドネシア国内の他の地域に先行し、私立大学として創設した後、国立化を進めたガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学は、1950年以降、宗教と教育の国立の専門職養成機関の創設に関わった。その際ガジャマダ大学は、教育に関する学部の創設に、植民地政府が創設した学校での西欧式の教育学よりも、イスラームの価値を尊重し、イスラーム関連科目とともに一般の専門教育を提供するインドネシア・イスラーム大学の教育学部の国立化を受け入れた。他方、インドネシア・イスラーム大学は、教育学部に加え、宗教学部を国立化したが、イスラーム宗教科目に特化するのではなく、一般の知識や学問の習得を尊重する国立イスラーム宗教大学校を創設した。

このようにガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学は、人口の約90%を占める大多数の国民が信仰するイスラームの要素を取り入れ、宗教と教育の専門職養成を目的とする国立の高等教育機関の創設に寄与した。

（2）大学が活用した「場」の象徴性

1946年から1960年代にかけて、ガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学が、主として大学教育に活用したのは、ジョグジャカルタの王宮関連施設とシュハダ・モスクだった。

王宮関連施設は、歴史的にスルタンやその関係者らが所有し、拠点としてきた場である。スルタンは独立後、ジョグジャカルタがインドネシア共和国の一部であることを主張し、オランダとの独立闘争期には、インドネシア共和国の独立を維持した。したがって、王宮関連施設は、インドネシア共和国の独立を支えた象徴的な意味が付与された「場」と言える。他方、シュハダ・モスクは、プリブミのイスラーム学識者らが、独立闘争での殉死者を追悼するシンボルとして創設した。かつてオランダ人が拠点としたエリアにおけるモスクの創設は、単なるイスラーム教教徒のための宗教施設である以上に、インドネシア共和国の独立の象徴でもある。このように、両大学が活用した王宮関連施設とシュハダ・モスクは、オランダからの独立を意味する象徴的な「場」であったことが
独立後のインドネシアにおける大学創設と国家との関わり

共通する。

おわりに

本稿は、ジョグジャカルタにおけるガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学の、独立後の国家との関わり方を論じてきた。両大学は、植民地期の遺産を基盤としたインドネシア大学とは異なり、新生インドネシアの建国を担ったプリブミのエリートらが主体的に関わることで、オランダによる支配の歴史からは一線を画す高等教育機関として創設された。インドネシアにおいて、私立大学の国立移管が各地でなされたのは、1950年代後半以降のことである。したがって、ジョグジャカルタに創設された二つの大学の国立化は、その先駆的な試みであった。

本稿を通して、両大学は、イスラームとイスラーム以外の分野のバランスを考慮する教育と宗教の国立の専門職養成機関の創設に寄与することで、独立後のインドネシアの高等教育の礎を築いてきたことが明らかとなった。また、両大学が、創設当初から主として使用したのが、オランダからの独立を象徴する「場」だったことからは、プリブミのエリートらによる、独立を強く意識した姿勢を読み取ることができよう。

教育文化省管轄のスコラ（一般学校）と宗教省管轄のマドラサ（イスラーム学校）から成る二元的な行政制度のもとでのインドネシアの学校制度は、近年、改革が進められ、「イスラームの国民教育制度化」や「国民教育制度のイスラーム化」が顕著である（西野 2012：38）。高等教育においても、イスラーム高等教育機関は、一般の学問領域の学部も開設して総合大学化が進んだ。他方、一般的高等教育機関では、キャンパス内にモスクを設置し、学内で宗教学習を奨励する傾向にある。ムスリムが国民の大半を占めるインドネシアにおいて、イスラームとイスラーム以外の分野をどう位置付け、共存させるかという現代における課題は、本研究を踏まえると、インドネシア独立直後からの課題であったことがわかる。

筆者は、これまでインドネシアの現代における教育の事象を研究対象としてきた。しかし、本稿を通して、教育的営みに関わる歴史的背景の解明は、現代
論 文

の教育事象をより深く理解し考察するうえで重要であることを認識した。今後は、こうした歴史的アプローチを考慮した教育の地域研究の深化に努めたいと考える。

【注】
(1) 移転の際に、ジャカルタの医科大学の書物や備品を、ジョグジャカルタ近郊へ列車で移動させた者もいた (Bambang Purwanto et. al., 1999: 6-7)。
(2) イスラーム団体のミアイ (インドネシア・イスラーム大会議) については、小林 (2008: 175－179) に詳しく論じられている。
(3) 場所の特定には、大学史に関する資料のほか、googleマップやウェブサイトの情報なども参考にした。
(4) 医学部は1970年代まで王宮の西側のンガスム地区（マンクブメン）や、王宮都市エリア内外の複数の場所を利用していた（Sutaryo 2016: 64-84）。マンクブメンには、現在ウィドゥヤ・マタラム大学（Universitas Widya Mataram）のキャンパスがある。
(5) 現在は、ジョグジャカルタ国立第2職業高校である（http://www.smk2-yk.sch.id/index.php/tentang/sejarah 最終閲覧日2018年1月16日）。
(6) Suratmin (2001: 83)、および、2005年（日本財団 API フェローとして滞在中）に同モスクを訪問した際、幼稚園校長ほかモスク運営者らから、筆者が聞き取ったことである。

【引用および参考文献】
小林寧子 (2008)『インドネシア 展開するイスラーム』名古屋大学出版会。
鳴海邦碩、アルディ・P・パリミン、田原直樹編 (1993) 『神々と生きる村 王宮の都市 パリとジャワの集住の構造』学芸出版社。
中田有紀 (2010) 「私立インドネシア・イスラーム大学 (UII) の発展—旧秩序期（1965年以前）の大学経営における「宗教」と「一般」をめぐって—」『アジア文化研究所年報 2009年』第44号、東洋大学アジア文化研究所、87 (134)：100 (121) 頁。
西野節男 (2012)「イスラームと教育」日本比較教育学会編『比較教育学事典』東信堂、38-39頁。
Abdurrachman Surjomihardjo, Kota Yogyakarta Tempo Doeloe, Sejarah Sosial 1880-1930, Komunitas Bambu, 2008.
Ahmad Basuni, Peranan Masjid Sjuhada’ selama empat tahun, Panitia penjelenggara buku peranan masjid Sjuhada’, 1956.
Azyumardi Azra, Saiful Umam (ed) Menteri-Menteri Agama RI, Biografi Sosial-Politik, Indonesian- Nederland's Cooperation in Islamic Studies (INIS), Pusat Pengkajian Islam dan Masyarakat (PPIM), Badan Litbang Agama Departmen Agama RI, 1998.
Bambang Purwanto, Djoko Suryo, Soegijanto Padmo, Dari Revolusi ke Refoermsi, 50 Tahun Universitas Gadjah Mada, Universitas Gadjah Mada, 1999.
Dewan Pengurus Pusat Badan Wakaf University Islam Indonesia, Buku Peringatan University Islam
Indonesia 10 tahun 7 Radjada 1364 - 27 Radjada 1374, 1955.

Djauhari Muhsin, et al. Universitas Islam Indonesia Sejarah dan Dinamika, Badan Wakaf UII Yogyakarta, 2002.

George Makdisi, The Rise of Colleges, Institutions of learning in Islam and the West, Edinburgh University Press, 1981

Mahmud Yunus, Sejarah Pendidikan Islam di Indonesia, Hidakarya Agung Jakarta, 1996 (1960).

Moctar Buchori, Abdul Malik, The Evolution of Higher Education in Indonesia, Philip G. Altbach, Toru Umakoshi (eds) Asian Universities : historical perspectives and contemporary challenges, The Johns Hopkins University Press, 2004, pp. 249-277.

Panitia Pendirian Masjid Peringatan Sjuhada di Jogjakarta, Kenang-kenangan “Masjid Sjuhada” 1952.

Purwadi, Babad Giyanti, Sejarah Pembagian Kerajaan Jawa, Media Abadi, 2008.

R. Murray Thomas, A Chronicle of Indonesian Higher Education: the first half centurey, 1920-1970, Chopmen Enterprises, 1973.

Sardjito, Laporan Tahunan Universiti Negeri Gadjah Mada bagi tahun pengadjaran 1952/1953, Jajasan Fonds Universiti Negeri Gadjah Mada di Jogjakarta, 1953.

Sardjito, Pidato 5 tahun Mendjabat Ketua Senat dan Kemudian Presiden Universiti Negeri Gadjah Mada Jogjakarta pada Dies Natalis ke V tanggal 19 Desember 1954 di Sitinggil, Jajasan Fonds Universiti Negeri Gadjah Mada di Jogjakarta, 1954.

Seno Joko Suyono, et al. Seri Buku Tempo, Hamengku Buwono IX, Tempo, 2015.

Supardi, et al. Setengah Abad UII, Sejarah Perkembangan Universitas Islam Indonesia 8 Juli 1945M-10 Januari 1994 M, 27 Rajab 1364H. - 27 Rajab 1414H, UII Press, 1997.

Suratmin, Mengenal Selintas Masjida Syuhada Yogyakarta, Masyarakat Sejarawan Indonesia (MSI) Cabang Yogyakarta, 2001.

Sutaryo, Sejarah Fakultas Kedokteran UGM-Rumah Sakit UGM/RSUP Dr. Sardjito, Puspagama, 2016.

William K. Cummings, Salman Kasenda. The Origin of Modern Indonesian Higher Education, Philip G. Altbach and Viswanathan Selvaratnam (eds), From Dependence to Autonomy: The Development of Asian Universities, Kluwer Academic Publishers, 1989, 143-166.
The Relation between the Establishment of University and Nation State in Indonesia after Independence: Two Universities and the Symbolism of their “place” in Yogyakarta

Yuki NAKATA
Asian Cultures Research Institute, Toyo University

The purpose of this paper is to examine the relation between the establishment of university and Nation State in Indonesia after independence focusing on two universities, namely, Gadjah Mada University, UGM: Universitas Gadjah Mada, and Indonesian Islamic University, UI: Universitas Islam Indonesia in Yogyakarta.

During the era when countries were colonized by European settlers, higher education institutions were founded to provide specialized education that was required by colonial authorities. In Indonesia, several schools such as a medical school, law school, and engineering school were founded by the Dutch colonial rulers at the beginning of the 20th century. After Indonesia’s declaration of independence in 1945, the Dutch returned to Indonesia to reoccupy it and integrated the aforementioned schools to establish the Universitet van Indonesie; the former UI (Universitas Indonesia).

In order to grasp the entire historical background of Indonesian higher education, it is necessary, in conjunction with the UI, to consider the universities founded by the elite pribumi (native people), who had studied at modern higher education institutions during the colonial era and were involved in the formation of the new state following independence.

In contrast to UI, in Jakarta, which was based on colonial heritage, the two universities in Yogyakarta were founded by the elite pribumi before 1950, when Yogyakarta was the capital city of the Republic of Indonesia. Originally, both universities were private universities that had different foundation groups, however, the both universities contributed to establish the national higher education institutions.

After the late 1950s, the national transfer of private universities took place in various places in Indonesia. Therefore, the nationalization of two private universities in Yogyakarta immediately after independence was a pioneering attempt.

In order to examine how the two universities in Yogyakarta were related to Nation State after independence of Indonesia, the following is clarified in this article.
1) **The two universities contributed to the foundation of higher education institutions, especially in the fields of education and religion in Indonesia.**

   In 1946, the UGM was a private university that had only opened a Faculty of Literature and a Faculty of Law. However, it was later integrated with higher education institutions that had been managed by several ministries and agencies of the Republic of Indonesia and became a national university in 1949. UII, on the contrary, was a private university, which established four faculties, namely, the Faculty of Religion, Faculty of Education, Faculty of Law, and Faculty of Economics in 1948.

   After 1950, when the Faculty of Literature, Education and Philosophy was established, UGM accepted the nationalization of the Faculty of Education at the UII, which provided education in general knowledge and academic subjects in conjunction with Islamic religion. In other words, when establishing the faculty responsible for nationwide professional educational training, UGM respected pedagogy based on Islam, rather than a Western European educational model of modern schools that had been established during the colonial era.

   Furthermore, UII also nationalized the Faculty of Religion and it became the National Islamic Religious College, the PTAIN (Perguruan Tinggi Agama Islam Negeri). The purpose of the PTAIN was to train religious professionals providing Islamic religious knowledge in conjunction with general academic subjects.

   Therefore, the two universities contributed to establish national higher education institutions, especially in education and religious specialties which offered academic education through both general and Islamic religious knowledge.

2) **Symbolism of the “place” utilized by the two universities.**

   Both universities were established in Yogyakarta, which comprised of a unique combination of two areas. The first area was the royal city area where the structure of the royal city remained and included the royal palace, public spaces, and the residences of the royal family and the aristocracy. The second was the area of the colonial city where the structure of the city remained and where the Indonesian national leaders established the Syuhada Mosque after independence as a monument of mourning for those who had died in the war of independence (1946–1949).

   From 1946 to approximately the 1960s, the developing UGM and UII mainly utilized the Yogyakarta royal palace and its related facilities as well as the Syuhada Mosque, which was established
in the colonial city area, as their academic learning spaces.

The royal palace of Yogyakarta and its related facilities have historically been owned by the Sultan (King) of Yogyakarta. However, following independence, the Sultan insisted that Yogyakarta become part of the Republic of Indonesia. Furthermore, during the war of independence, he supported the independence of the Republic of Indonesia. Consequently, the royal palace and its related facilities are a “place” symbolizing the birthplace of the Republic of Indonesia.

On the contrary, in the colonial city area, national leaders established the Syuhada Mosque after independence as a monument of mourning for those who had died in the war of independence. Accordingly, the Syuhada Mosque was a “place” regarded as a symbol of the independence of the Republic of Indonesia from the Netherlands by the leaders of pribumi and was more than simply a religious facility for Muslims.

Therefore, the places where the UGM and UII provided academic opportunities were symbolized “place” as independence from the Netherlands during a period of time when it was not possible to establish academic learning spaces for their own universities in Yogyakarta.

Based on the aforementioned, it becomes evident that the two universities founded by the elite pribumi in Yogyakarta became the cornerstone of higher education in Indonesia contributing to the establishment of national professional training institutes in the fields of religion and education that would consider the balance between Islam and non-Islamic knowledge. It is also evident that the places where the two universities used from 1946 to approximately the 1960s, in Yogyakarta were symbolized “place” as independence from the Netherlands. Consequently, it reflects the elite pribumi had an attitude that is very conscious of independence.